

山越阿弥陀図



2005年7月3日、多摩美術大学で川本喜八郎の人形アニメーション映画

「死者の書」の試写会があった。この映画は、昨年4月より約10ヶ月間、多摩美術大学のスタジオで撮影された・・・その縁から、一般公開に先立っての上映となったものである。

[川本喜八郎の挨拶]

25年来の大きな夢、折口信夫原作の人形アニメーション「死者の書」が、本当にたくさんの方々のお力を得て、このほど無事完成いたしました。心よりお礼申し上げます。奈良時代、藤原南家の郎女（いらつめ）の一途な信仰が、若くして非業の死をとげた大津皇子（おおつのみこ）のさまよう魂を鎮める物語は、今、我々が立ち止まって日本人とは何か、どこへ行こうとしているのか、という問いかけに何らかの示唆を与えてくれるもの信じています。 ご覧くださる皆さまに磨かれて「死者の書」が輝きを増すことを

念じております。できるだけたくさんの方々にご覧いただけますよう、今後ともよろしく
お願い申し上げます。

たしかに、川本喜八郎がいうように、「死者の書」が今、我々が立ち止まって日本人と
は何か、どこへ行こうとしているのか、という問いかけに何らかの示唆を与えてくれるか
もしれない。しかし、村井紀（おさむ）の「反折口信夫論」（2004年4月、作品社）
などがあつたりして、皇国史観の人・折口信夫という評価がどうしても付きまとう。した
がって、小説「死者の書」を読む際にはよほどの注意が必要だ。小説である「死者の書」
をただ単に小説として見るだけならば、もちろん失敗作だという評価もなくはないのだ
けれど、私は・・・、神仏習合を礼讃するものとして、あるいは源信が重要な役割を持つ
あの・・・「源氏物語」との共通点なども伺えて・・・大変面白いと思う。

折口信夫は、「山越しの阿弥陀像の画因」の最後に・・・『 私の女主人公南家藤原郎女
の、幾度か見た二上山の幻影は、古人相共に見、又僧都一人の、之を具象せしめた古代
の幻想であった。さうして又、仏教以前から、我々祖先の間に持ち伝えられた日の光の凝
り成して、更にはなばなと輝き出た姿であったのだ、とも謂われるのである。』・・・
と説明している。けだし、もつともである。彼のいちばん言いたいことがそれであったの
であろう。

ここに、僧都とは、恵信僧都のことであり、源信のことだ。僧都のふるさとは二上山の
麓、当麻（たいま）である。

それでは、折口信夫の注目する・・・「山越阿弥陀図」を見てみよう！



山越阿弥陀図その1

鎌倉時代（13世紀）国宝 永観堂

山越えの阿弥陀と観音、勢至の二菩薩からなる来迎図。

山並の手前には、悪霊から往生者を守護する四天王と持幡（じばん）童子が佇む。

幡（ばん）は魂送りのシンボルらしい。

左上の「阿」字は阿弥陀の阿であると同時に

大日如来の象徴記号でもあり、

両者を同体とする高野山真言浄土教系の思想が反映されている。

山越阿弥陀図その2

鎌倉時代（13世紀）国宝 京都国立博物館

臨終しようとする信仰者の前に、

阿弥陀仏と眷属たちが極楽から迎えに来た場面を描いている。

本作品は一般的な来迎図の形式をとりいれて斜め向きに変化しているのが特色である。

やわらかい山岳表現ともども構図がよく整い、

鎌倉仏画の代表的作品にあげられる。





山越阿弥陀図その3

折口には、この物語を書く前、このたった一枚の当麻曼陀羅があっただけだ。

中将姫が蓮糸で編んだという伝承のある曼陀羅だ。

折口はこれを見つめ、これを読み、

そこに死者の「おとづれ」を聞いたのである。

(松岡正剛の千夜千冊より)